第３回門真市学校適正配置審議会議事録

開催日時　令和元年７月８日（月）　午後２時～午後４時20分

開催場所　市役所本館２階　大会議室

出 席 者　横山俊祐、浦嶋敏之、西孝一郎、松﨑淳子、村上香織、大田俊二、後藤忠夫、日置芳太郎、上村梨恵、加藤諭、濱﨑恵子、国吉孝、上甲尚、明智威久

事 務 局　満永教育部長、西口管理監、中野教育部次長兼教育総務課長、三村総括参事、渡辺教育総務課参事、峯松学校教育課長、髙山学校教育課参事、植原学校教育課参事、東谷教育総務課長補佐、宮﨑教育総務課長補佐、前馬教育総務課副参事、柳瀬学校教育課長補佐、向井学校教育課長補佐、松本学校教育課副参事、長教育総務課主任

傍 聴 者　１名

議　　事

〇開催

事務局

定刻となりましたので、第３回門真市学校適正配置審議会を開催いたします。

本日はご多忙にも関わりませず、ご出席いただき誠にありがとうございます。本日司会を務めます、教育部次長の中野でございます。

よろしくお願いいたします。

本日は、委員16名中14名が出席されており、門真市附属機関に関する条例の施行に関する門真市教育委員会規則第５条第２項の規定により、会議が成立していることをご報告申し上げます。

本日は、吉岡委員、清水委員はご都合がつかず、欠席となっております。

なお、後日議事録を作成するため、会議を録音させていただいております。ご発言に際しては、お手元のマイクのボタンを押していただきますようお願い申し上げます。

次に、お手元の資料の確認をしたいと思います。
１点目　会議次第。２点目　資料１　第２回審議会の振り返りと確認について。３点目　資料２　小中一貫教育とは、どのようなものでしょう。４点目　資料３　本日のテーマ。門真のめざす教育の方向性と学校のあり方について。となっております。すべておそろいでしょうか。それでは、おそろいのようですので、進めさせていただきます。
以降の進行は、横山会長にお願いしたいと思います。会長よろしくおねがいいたします。

会長
よろしくお願いします。では改めまして、第３回門真市適正配置審議会を始めたいと思います。午前中は小中一貫校を見学して、小中一貫とはどういうものかということを多少なりともご理解いただいたものと思っております。今日の議題は次第にもありますように、門真のめざす教育の方向性と学校のあり方についてというのがメインの議題です。
前回は時間を超過しながらも門真の学校の現状について前半に議論しまして、後半はキャリア教育と小中一貫教育について議論をしました。今日もその続きということになると思いますが、改めてこれから門真の学校をどういうふうに考えていくかということについて議論を深めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。
では早速ですが、まず、前回の振り返りということで事務局から説明をお願いします。
その前に、今日初めてご参加いただいた大田さん、一言ご挨拶お願いします。

委員
初めまして、大田です。よろしくお願いします。

会長
よろしくおねがいします。
では、今日は２人欠席ですが、これでフルメンバーということで進めていきたいと思います。では資料１の説明をお願いします。

事務局
教育総務課の渡辺です。それでは資料１の説明をさせていただきます。お手元資料１　第２回審議会の振り返りと確認についてという資料をめくっていただけますでしょうか。先ほど会長からもご説明いただいた通り、前回、門真の現状

やキャリア教育と小中一貫教育ということで話を進めさせていただきました。

２ページでございますが、皆様から出していただきました意見を、内容に沿って整理をしたものになります。

まず、学力についての意見ということで、学力テストの数値だけではなく公立学校では人格形成や、生きる力を育んでいる部分も大きく、学力をどう捉えるのかといったことも大事ではないでしょうかといった意見が出ました。

次に不登校についてでは、小学校にも増えてきており、こういったことが低年齢化しているのではないかという話題でありますとか、不登校の要因は様々あるけれども、人とのつながりが切れてしまって、孤立してしまうのが大きな課題ではないかというような話。小学校から中学校に上がる段階、また、幼稚園、保育園から小学校に上がるタイミングという環境の変化もその要因である場合があり、その接続をどうスムーズにするのかということも重要ではないかというお話をいただきました。

学校づくりの視点ということでは、小中学校を公立でと思ってもらえる魅力的な学校を創っていくことは、地域にとっても、子どもたちの地域への愛着を育むうえでも大事ではないか。不登校などの具体的な要因を探ることで、子どもの過ごしやすい場所づくりなど、解決に資する学校づくりに参考になる部分もあるのではないか。門真の子どもたちには、データでは表されていない人懐っこさや子どもらしい可愛さがある。門真らしい学校づくりのヒントがあるのではないか。学校を通じて、保護者のつながりや地域のつながりをつくることで、学校で学ぶ子どもたちの環境も良くなるのではないか。

ということで、意見をいただきました。

続きまして３ページです。地域と学校との関わりについてということで、門真の現状や課題、また、教育の内容をお話ししたうえで、皆様からは、地域と家庭、それから学校がどのようにつながっていくのか、多様な人間と関わる環境をつくることが重要ではないか、この部分が一番たくさんの意見が出たのかなというふうに思っています。

たくさんの意見が出ておりますが、最後のまとめのところを見てください。

人のつながりの中で子どもを育てたいと思っている。そのつながりをどう創っていくのかというのが求められているところではないか。

人懐っこい子どもが多いというのも、多くの人のつながりで生まれてきたものではないか。門真の強みであり、ヒントになるのではないか。ということでまとめられております。

また、親と学校とが触れる機会をもっと密に持つ、地域や親を含めて学校に目を向けるような仕組みを学校の中に創っていくのが重要。そして課題への対症療法としてではなく全体として、「学力も含めた生きる力をどう捉えるか」「人と

のつながりをどうつくるか」という中で、学校をどう創っていくのかということを考えていくというようにこの審議会を進めたいということでまとめております。

続きまして４ページです。

人とのつながりの中で、自分の生き方を見つけるためのキャリア教育についてという見出しになっています。これは、前回の議論を踏まえた内容としております。

事務局からは、門真市の現状を踏まえた、今後の学校づくりと教育の方向性としてキャリア教育、小中一貫教育について説明をさせていただきました。その中で、キャリア教育については、子どもたちが生涯にわたって生きる力を身に付け、自立していく過程を様々な人とのつながりの中で育んでいくという観点で、様々な意見を出していただきました。

出された意見については、記載のとおりですが、まとめといたしまして、キャリア教育に関連した具体例について、様々な意見、面白い事例を紹介いただけました。キャリア教育そのものの必要性や方向性については皆さん肯定的であり、門真の新たな教育にとって可能性のある話ではないか。そして、子どもたちの個性や能力、一人ひとりの違いを学校の中でどう伸ばしていくのか、一人ひとりの生きるちからをどう身につけていくか、というあたりについて、将来を見据えた中で考えるのが、キャリア教育の根幹であるということではないかということでした。

次に５ページです。

一方で、前回事務局で説明した内容が、全てが了承ということではなく、資料の中での表現や言葉の使い方については、いくつか課題があるとの意見もありました。

一つ目が、キャリア教育と小中一貫教育の関係性についてです。小中一貫教育とキャリア教育はどちらも手法の問題。キャリア教育を基盤とした小中一貫教育と説明をしたところですが、「基盤とした」よりも並列が良いのではないか。皆さん、人とのつながりを大事にしたほうが良いと思っておられる。その先にあるのは、子どもたち一人ひとりの自立ではないか。そのことから、『人とのつながりを活かして自立をめざす』教育というのはどうか、という提案を頂いています。

もう一つ、地域との連携・交流についてです。資料の中で、地域との連携・交流という言葉を使っていましたが、皆様の議論の方向性として、これから新しい学校を創っていこう、地域と学校がもっと密接に関わることが大事だという話も踏まえると、一般的な連携や交流ということだけでいいのかという問題提起がなされました。地域の人達も学校に踏み込む、学校も地域に踏み込む、地域と

ともに生きる学校というようなもう少し厚みがある言葉で表現できないかというご提案を頂きました。

これらのご意見を受けて、矢印の先ですが、門真市がめざしたい方向性について、改めて事務局より意見を出させていただきました。

就学前から小学校・中学校と教職員も思いをひとつにして、学校の中での縦のつながりとともに、地域のいろいろな人とのつながり、横の広がりも創りたい。縦のつながりや横のつながりとともに、時間軸の中で、子どもたちを系統的に見ていくことがキャリア教育を行う上で大事である。教師、地域の人、大学生、様々な立場の人がみんなで門真の子を支える。その中心にあるのが学校。子どもが良き大人のモデルと出会い、触発されて頑張る、そして学びのモチベーションを持ち、それが将来の自立につながる。こうしたことをめざして門真ではやっていきたいという話をさせていただきました。

この部分のまとめとしまして、門真がめざしているキャリア教育は、縦のつながりや横のつながりとともに、時間軸としてのつながりを含めた多様な人間関係の構築をとおして、子どもたちの自立をめざし、しっかりと生きていくというものである。門真の考えている教育は、一般的な「キャリア教育」という言葉以上の大きな可能性を持っている。キャリア教育という呼び方自体も変えてもいいかもしれない。つまり、「人と人のつながりのなかで一人ひとりが育ち、自立していく」ということ、これを門真の言葉でうまく表現できれば良い。この審議会の中で検討していきましょうということになっております。

前回の振り返りの資料としては以上となります。

会長

ありがとうございました。この資料に書かれている通りの議論だったと思いますが、これに関して、こんな発言をしたのに反映されていない、趣旨がズレているというようなことがあればお願いします。いかがでしょうか。

前半は門真の学校の実態や課題などについて、学力、不登校、地域との関係を含めて、つながりが希薄な状態にあって、それが一つ問題を深くしている要因ではないかという議論がありました。そして、それらを踏まえてこれから門真の学校をどう創っていくかという中で、２つの方法として、ひとつはキャリア教育という言葉、もうひとつは小中一貫教育という言葉が出てきました。

キャリア教育に関しては結構議論がありまして、いわゆる職業教育じゃない、将来に向けてどういう仕事に就くのかというための教育ではなく、つながりということを踏まえながら、一人ひとりの個性や興味を活かしながら、人間としての自立を学校教育の中でどう促していくのか、ということがひとつの課題であるから、キャリア教育という言葉をもう少し大きく捉える必要があるという議

論があったと思います。
　同時に、小中一貫教育についてはその場でそれほど議論が進んだわけではなく、頭出しができたというような状況だと思います。
　こういったことが、私の理解ですが、いかがでしょうか。意見や付け加えることがあればお願いします。よろしいでしょうか。

委員
　おっしゃる通りでよいと思います。

会長
　学校の先生方、地域の方、どうでしょうか。よろしいでしょうか。
　それでは見事にまとまっているということでよろしいでしょうか。前回のまとめとしては資料に過不足ないということでお認めいただいて、今回は、これをベースに発展的に議論していきたいと思いますのでよろしくお願いします。
　それでは、本日は、門真の教育をどうしていくかというところのもうひとつの柱である小中一貫教育を具体的にどのように考えていくのか、また、午前中に小中一貫校を見学してきたこともありますので、その感想なども踏まえながら議論を深めていきたいと思います。
　まず、はじめに西先生が小中一貫教育のスペシャリストですから、小中一貫教育とはどういうものなのかをミニレクチャーしていただいて、それを踏まえながら、合わせて今日の見学の感想も出していただいて、門真にとっての小中一貫教育のあり方について議論していきたいと思います。それでは、西先生よろしくお願いします。

委員
　私は小学校でずっと教員をやっておりまして、小学校の教頭もしておりましたが、その年に、小中一貫教育ということで、５・４制というスタイルをとることになりました。５年生までは小学校の校舎に行っておりまして、２つの小学校の子どもたちが６年生になると中学校の校舎で学習する、５・４制という制度をはじめました。その時に管理職として中学校に行かないかということで、私が中学校に行くこととなり、１年間小中一貫教育に関わっていました。そんな関係もあって、中教審などにも呼んでいただいて、制度設計などにも携わるようになったということもあります。３年前には午前中に行かれたほそごう学園で簡単な講演をさせていただきました。
　では、私の方からは簡単にではございますが、小中一貫教育とはどのようなことでしょう、ということで、私見も入れながらですけれどもお話ししたいと思い

ます。まず、なぜ小中をつなぐのかということですが、これは中教審での資料をもとにしています。

まず、子どもの身体的発達が早くなっているということです。60年前に比べると３年程度子どもの成長が早くなっています。グラフを見てください。これは男の子の身長平均値なのですが、昭和23年と平成25年との間の変化を比較すると、平均身長はこのように伸びていっています。そしてこの表は何かといいますと、１年間の身長の伸びを表しています。薄いほうは昭和23年ですが、どこが一番伸びているかというと、16歳の時、男の子の身長が１年間で一番よく伸びています。何となく記憶があると思います。男の子は中学校から高校にかけてぐっと伸びた。ところが今はどうでしょう。12歳が一番よく伸びているところです。つまりここだけでいくと、４年間も一番よく伸びるポイントがずれてきています。続いて女の子を見ますと、昭和23年は12歳の頃が女の子は一番身長が伸びています。これも何となく覚えがあると思いますし、女の子は成長が早いといわれていました。今は１歳のずれですが、今は11歳の頃が一番伸びています。また、それに向かって９、10、11歳と伸びの大きい時期が続いています。この辺りまで含むと、３年程度差が生まれてきていると思います。今度は男の子の体重の平均値ですが、昔は15歳ぐらい、中学１年時に一番よく増えましたが、今は12歳、小学６年で一番増えています。確実に３年間の違いが出てきています。同じように女の子の体重の平均値ですが、これは14歳の頃が昔は一番よく増えたということですが、今は11歳です。５年生ぐらいですね。明らかに３年程度の差が出てきています。その中で昔と同じ制度設計で本当にいいのかという疑問が生まれてきました。

もう一つ、なぜ小中をつなぐのかという理由の一つが、段差への対応が必要となったからです。皆さん聞かれたことがあると思いますが、中１ギャップという言葉が世に出てきました。中学校１年生になると、学習の様子もガラッと変わる、これまでは担任の先生がいたのに、教科担任制になり、自分の担任の先生がない時もあるとか、部活動が始まるとか、中間テストや期末テストがあって、学習上の悩みが出てくる。また、それと同じように自尊感情がずいぶん下がってしまうということがあり、ここに何らかの段差への対応が必要となってきました。

これは全国の調査ですけども、前回も少し問題になりました不登校児童についてですが、小６が全国で6920人、中１になると一気に倍以上に跳ね上がるという結果が出ています。もちろん調査の基準もありますので一概には言えませんが、このような形です。ここから中学３年生までに向かって一気に上がっていきます。それから、これは全国の調査ではなく、小中一貫教育に早くから取り組まれた広島県呉市の発表の資料がありますが、自分が周りの人、家族や友達から認められていると思いますかとの問いに、１、２、３、４年生では肯定的回答がこ

こまで行きます。ところが５年生になると一気にこの辺まで肯定的回答が減ってきて、否定的回答が多くなっています。ここにも何か一つ段差があるのではないか、という疑問が出てきたわけです。では、段差があるのであれば対応しなければならない、先ほどの発達の３年ほどの違い、それからここに段差がありそうです。

もう一つ、これが先ほどからや前回の話し合いと一致するわけですが、人のつながりが少なくなったということも、中教審の中で言われていました。特に縦のつながりの減少ですよね。これを何とかしないといけないという話になりました。ここにあるのは３世代同居の数なんですが、かつて、昭和61年、昭和61年というと私たちの感覚で言うとそんなに前ではないんですが、このころは15.3パーセントだったんですが、今は半減しています。３世代同居はかなり少なくなっているんですね。私たちの感覚でも少なくなっているように感じます。次に、児童のいる世帯は昭和50年は53パーセントでした。平成24年では４家庭に１人で昭和51年から半減しています。こういう時代に入ってきているわけなんですね。少子化といいますが、それだけではなくて、人の縦のつながりは確実に減っていっているのが今の兆候なんです。

この３つの観点を元にして新しい何らかの制度が必要なのではないかということで生まれてきたのが小中一貫教育なんです。小中一貫教育のイメージですが、幼稚園や小学校、小学校から中学校、この段差のところにリレーゾーンをつくることというふうにお話をしているんですね。なめらかなバトンパスです。特に小中一貫教育でいくと、小学校６年生と中学校１年生は小中学校のリレーゾーンにあたると思います。ここでできるだけスピードを緩めないバトンパスをみんなで考えていくことが小中一貫教育のヒントだと思っています。ここが中１ギャップの解消だけに終わるとすごく寂しいですよね。

私は小学校で担任をすることが多かったので、その経験として、６年生は卒業時点である程度ピークを迎えます。子どもたちはすごく逞しい顔をして卒業していきます。ところが中学へ行くと１年生になります。一番下からスタートです。本当だったらもっとできるはずなのに、そこは意識されていません。でも、今、小中一貫教育が色々なところで取り組まれるようになって、中学校の先生も小学校でここまでできるということをだいぶわかられてきました。同じように小学校の教員は中学校の段階でここまで行けるというのがわかってきました。そうするとここのバトンパスがスムーズになり始めました。

小中一貫教育の定義なんですが、少し難しい文章になりますが、ここを確認しておくことがとても大事になるところで、見ていただきたいのですが、まず、昔からずっとやってきたのは小中連携教育なんですね。これは私が採用されたころからずっとやっていました。何十年も前からです。小中学校が互いに情報交換、

交流をすることを通じ、小学校教育から中学校教育への円滑な接続をめざす様々な教育、小中学校が接続をめざして情報交換したり交流したりして接続していく、これは小中連携教育としてずっとやってきました。ところが、ここにきて、小中一貫教育といわれるようになりました。これは何かというと定義は、この小中連携教育のうち、小中学校がめざす子ども像を共有し、まずどんな子どもにしたいのかということを中学校ブロックで共有することと書いてあります。次もすごく大事なところになりますが、９年間を通じた教育課程を編制しと書いています。これも条件になります。それから、それに基づき行う系統的な教育ということで、共有ということと、一貫ということと、系統ということが出てきます。このキーワードを落とさずにいけば、小中一貫教育のなるということです。

小中一貫校には二つのタイプがあります。

一つは義務教育学校で、今日見てこられたほそごう学園もこれにあたります。もう一つは小中一貫型小・中学校となっています。義務教育学校は新たな学校種で、一つの学校ということになっておりまして、一人の校長先生と、一つの教職員組織です。修業年限は９年ですが、前期６年、後期３年と分けています。ただ、９年間ずっと区切りなしというのは子どもにとっては変化がないということもありますので、４・３・２という新たな区切りをつくっている学校もあります。私が勤めていた学校は５・４と区切っていました。これは特に決まっているわけではなくて、小中一貫教育については市町村から先に生まれてきた制度なので、中教審ではある程度制度的な区切りをつけなければということでつけましたが、それぞれの地域が全国で色々なことを始めています。

もう一つの小中一貫型小・中学校というのは、組織上独立した小学校、中学校が一貫した教育を施す形態ということで、これは小学校と中学校がそのままあるけれども、小中一貫教育を行っていますという形になります。例えば併設、隣同士にあって、小学校にも校長先生、中学校にも校長先生という形です。分離している形もあります。中学校、小学校、小学校と分離していますけれども、小中一貫校です。なぜかというと、９年間を通じた教育課程を持っていたり、子ども像を共有していたり、系統的な教育を行っているからです。また、逆に、少しややこしいことを言ってしまいますが、併設であっても分離であっても、校長が一人、組織が一つであれば義務教育学校と呼ぶ場合もあります。私が関わらしてもらっている京都市の小中学校では、５・４制で行っています。小学校と中学校の校舎は700メートル離れていますが一人の校長、一つの教職員組織ですので、義務教育学校になっています。このようにどちらもそうですが、９年間の教育目標の設定、９年間の系統性を確保した教育課程の編制ということが、大きな条件としてあります。

ここで教育課程とは何かというと、簡単に言えば教育の計画です。学習指導要

領は言い換えれば、国の教育課程です。各学校は学習指導要領の中にある計画ではなく、指導要領を踏み込んで、門真は門真なりの特質を生かして、あるいは学校の特質を生かして教育計画を作る、ここに小中一貫の教育課程も入ってくることになります。このようなものをもっていれば、一貫教育になります。建物があるから小中一貫教育ということではありません。

具体的にはどう進めるかということですが、共有ということと、一貫ということと、系統ということが大切です。小中一貫教育は共有プラス一貫プラス系統ということだと思います。一貫は少し分解すると共通プラス連続になります。共通したことをずっと続けることが一貫だと思います。あなたの言うことは一貫しているという時は、同じようなことをずっと続けて言っているというような状況ですよね。簡単に言うと、わかり合い、そろえて、続けて、つなぐことが小中一貫教育ではないかなと思います。

では、何を分かり合うのかということですが、これはいわゆる空間軸の話です。分かり合う時にはまず目的を共有するということ、めざす子ども像を共有することで、門真の子ども、あるいはそれぞれ中学校区の子どもをどう育てていくのかということを共有する、それから、めざす学校像の共有、目標の共有が大事です。目的があって目標がある。この目標は、今日の先進校視察などを通して、どんな学校にするのかなどの目標を共有すること、それから３つ目は計画の共有で、これは教育課程の共有になります。どのような教育課程にしていくのかということですね。

次に一貫ということですが、何を共通して連続していくのかということです。そろえて続けていくことですね。これはお手元のプリントにも書いていますが、授業スタイルをそろえて続ける。例えばめあてがあって振り返りがある授業スタイル、課題があってまとめがある授業を１年生から中学校３年生までそろえて続けるんだというやり方です。そろえて続けると、とても効果が上がります。小学校１年生の担任の先生がとてもよかったけど、２年生になって全然違うやり方になると、子どもの力は積みあがっていきにくく、もったいないです。小学校１年生から中学校３年生まで同じような学習スタイルをとっていると考えてください。必ずどの先生もめあてがあって振り返りがある、課題があってまとめがある、これがあれば子どもはやっていないと先生これ前の先生からずっとやってきたよ、と言えるくらい力が付きます。明らかに力がつくことは実感しています。何をそろえて続けるか。学習ノートをそろえて続ける。これは、中教審の後に書かれた小中一貫教育の手引きの中にも載っています。話し合いをそろえて続けるとか、発表スタイルをそろえて続ける、それから家庭学習をそろえて続ける、学習方略や学習スキルをそろえて続ける、学習規律や生活規律をそろえて続ける、これは色んな小中一貫校で、学びのスタイル、あるいは生活のスタイル

のような形で書かれているところがたくさんあります。このように、何をそろえて続けていくのかということを考えていくと、子どもの伸びは確実に早くなります。そしてリレーゾーンを引くことができます。

もう一つ系統性ですが、これはつなぐということですが、時間軸でつないでいくということです。まず単元同士をつなぐ、教科をつなぐ、学年をつないでいくということです。そして、社会とつなぐとか、将来の自分とつなぐという縦のつながりもあります。これは前回の門真市の小中を通したキャリア教育とつながると思います。社会とのつながり、社会というと私たちの頭の中の時間軸ですね。地域とつながるというと空間軸ですが、そんなことしていると社会に出たら困るで、という時は時間の軸を意識していますよね。このような時間の軸でのつながりが大事だと思います。それから人をつなぐというやり方もあります。それは小学校高学年における教科担任制とか、相互乗り入れ指導のような形でリレーゾーンをつくる仕組みができると思います。ただ、教科担任制をすれば小中一貫とか、乗り入れ指導をすれば小中一貫というわけではありません。

終わりになりましたが、縦のつながりをつくることが小中一貫教育であると思います。もちろん横のつながりも必要です。ただ、本当に不足している縦のつながりをこれから意識していかなければならないところではないかなと思っています。なぜかというと、縦のつながりをつくると、上級生への憧れが生まれます。体育祭を一緒にしていても、あんなふうな中学生になりたい、あんな中学校３年生になりたいと思うんですよね。絵を１枚描いても、あんなふうになりたいという憧れの気持ちが子どもたちを育てます。それから下級生への思いやりが生まれます。中学生と小学生が運動場で一緒に遊んで大丈夫だろうかと最初は心配しました。でも中学生は確実に思いやりの心で小学生を見ています。小さい子どもがいる前では悪さはしません。とても格好悪いですよね。したがってトラブルは起こりにくいです。同世代の者がいるときに、上下関係をつけようとして、トラブルが起こると思いますが、明らかに上下関係がある中では、思いやりや憧れが出てきます。

もう一つは子どもは長い目で育てたいということです。特に中学校の３年間はどうしても進路も絡みますから、少しスパンとして短めで、先生方も一生懸命取り組むと焦る部分もあります。何とか結果を出さないといけないという思いです。でも、９年間ということで見るともう少しゆっくり育てることができると思います。時間をかけてゆっくり育てるということは、日本の教育の良さでもあったはずです。ここをもう一度見直したいなと思います。このように時間をかけて子どもたちをゆっくり育てるということが、本当の意味での自立につながるのではないかなと思っています。それが社会とつながる、将来の自分とつながるということではないかと思うので、小中一貫教育は、このような縦のつながりの

中で子どもたちの心や成長を育んでいくシステムだと思っています。

会長
　ありがとうございました。小中一貫教育がなぜ必要になってきたのかという、背景の話からは始めて、小中一貫教育とはどのようなものなの、どういう哲学がそこにあるのかということについてご説明いただいたところです。まずは、西先生の今の話について、ご不明点や、ご意見おありかとは思いますがいかがでしょうか。

委員
　素晴らしいお話だと思います。午前中に見たことと通じる部分がありました。

会長
　午前中の学校見学も含めて、小中一貫教育についてどのように感じておられますか。

委員
　朝から学校見学をしてきましたが、今、西先生にお話しいただいた内容とほそごう学園の視察の中で、ほそごう学園の教頭先生か教育委員会の方がおっしゃったことだと思うんですが、中学３年から小学校１年まで９学年居ると、人間関係が１年から９年間あるということで、非常に素晴らしいということをおっしゃっていたと思います。私の考えというのも、人生というのは人間関係を大切にで、人と人との付き合いで成り立っていると思います。門真で一つくらい、あんないい学校を創って、どこからでも門真中から通える素晴らしい人間を育成してほしいと思いました。ほそごう学園のようなものを、お金もかかるし大変でしょうけど、一つ創ってみましょう。

委員
　本日見学させていただいて、やっぱりきれいですし、案内をしていただいたところも、ここにはこういう意見でと、自分の思い入れをもって学校をつくるんだという気持ちで、今まであるものを変革するよりも、新しくつくるとなるとやっぱり失敗すると批判もあるので、より良くしよう、ここはこのように良くするために努力したんだという説明が、下駄箱一つにしても思いを入れて説明していただけたので、そのような気持ちが、いい学校、いい教育につながるのではという感想をもちました。

委員
　リレーゾーンの６年から中１に上がるときが９年間いることができるので、いいように流れが行くんだなと思いました。６年でピタッと終わってしまうんではないんですということを聞いて、いいなと思いました。

会長
　リレーゾーンっていい言葉ですよね。

委員
　誰を対象にするかを考えると面白いですよね。子ども同士がリレーゾーンをつくることもいいし、周りの大人がリレーゾーンをつくるのかなどと考えると、面白いですね。

委員
　今日見学した学校というのは、先端を行っている学校で、１年生から９年生までという中で、小学校の先生も中学に送り出すときに、不安を持っている子どもであれば、同じ学校内にいれば、廊下であったときなんかに声かけをしたり、そんなところではすごくいいのかなというところもあります。学校を新しく、一貫教育の学校を創るところはすごく力が入っていくけれども、反対に連携型の小中一貫校に関しても、遅れ劣らずというところで、同じような連携のとって行き方、また、学校同士が離れているところの連携というのは少しまた違うところがあるかもしれないけれども、同じように力を入れていっていただければなというふうに思っています。同じ門真に住んでいて、あまりにも差が開いていく教育にはなってほしくないなという思いはあります。全体で底上げしてほしいです。

委員
　私も午前中見させていただきまして、いろんな説明を聞く中で、先ほど西先生もおっしゃられた縦のつながり、１年生から９年生まで、10歳近い年齢の幅で、つながりを持てるということが大事なことなのかなと思います。私も小学生の時に、２、３歳上の人でも、大人に見えたんですよね。それが９歳離れたらものすごく大人に見える。そんな感覚を持ったままずっと成長していくので、なりたい10年後の自分が見えている感じになりますので、これは非常にいいのではないかなと思います。また、今日見させてもらった中で、職員室が一つの大きな場所で、１年生から９年生までの一つの組織で職員会議をする。これは例えば中学３年生に課題のある生徒がいるということが１年生の先生にまで全部伝わるので、学校全体で課題に取り組んでいくことができるという環境は非常に素晴ら

しいことだと思いました。門真でもこのような環境を創っていくというのは大事なのかもしれないなと思いました。

会長

先ほどの西先生の話にも、低学年の子が上の学年を憧れとしてみる、上の子は下の子に思いやりの心を持つとありました。それから、今の10年先が見えるという言葉はいい言葉だなと思うんですが、そのような上下のつながりを意識してつながることもあるし無意識につながることもあると思うんですけど、これは義務教育学校、小中一貫校の大きい特質と思っていいんでしょうか。

委員

このような異学年との交流では、３年くらい幅を開けて、例えば５年生と中３というふうに、少し開けることが多いようです。それがうまくいくような感じで、それぐらい離れているほうが憧れの目もできるし、思いやりもできるということです。逆に６年生と中１のように接したところは、どっちが上かよくわからないような状況も生まれ、もう少し開けたほうが効果的だと言われています。ただ、やはり明らかに３年くらい離れていても憧れる気持ちはできますし、すごいなという目で見ますので、いいと思います。

委員

午前中見させていただいて、ほそごう学園は山手の方で広大な土地があって、その点門真ではちょっとどうなのかなというのが正直なところです。ただ、異年齢で関わるということでは、自分が子どもの頃は地域の子ども会などで異年齢と関わっていたなという記憶を思い出して、今はなかなか地域でのつながりがないので、小中一貫教育のような形で大人が創っていかないといけないのかなというふうには思っていて、見学先では上の子が下の子に何か教えている写真なども飾っていて、上の子の表情がすごく柔らかくて、説明の中でも子どもの表情が上の子も教えてもらっている下の子もとても表情が柔らかくなると言っていたので、それがそのまま出ていたので、同級生だけじゃなく異年齢で関わるというのは、お互いに成長をしていけるのかなということで、あそこまでの規模とは言わないので、門真にもぜひあのようなものがあればいいですね。

会長

規模というのは学校の大きさのことですか。

委員
　学校の大きさとかプールの床が上下するとか、あそこまでは。経済的にも大変とは思うんですけれども、近づけるようにみんなで全体的に考えていけたらいいなと思いました。

委員
　これまで資料などで一貫校であったり、義務教育学校について目にしていましたが、実際に見るのは初めてで、素晴らしいなと思ってみていましたが、私は学校現場の人間ですから目に見えるいい面だけではなく、実際にやった時にはどういうよくない面が出てきて、それをどうクリアしていくんだろうかということで、気持ちの半分は素敵な学校でいいなと思いながら、いざ自分がそこに勤めた場合にどういったことが起こるんだろうとずっと頭の中でぐるぐる考えてまして、結局何もまとまらなかったんですが、そういったこともこれから進めていくのであれば考えていかなければならないなと思っています。
　あと、今勤めている中学校は向かいに小学校があって、学校同士がとても近い距離にあります。このような学校に勤めたのは初めてで、主観的なものですが、学校同士の連携という意味での距離も近いと思います。先生方ともよく連携をとれています。学校が停電になった際も、すぐに連携をとって対応できて、このような形の連携もあるので、一つの施設になるメリットは十分あることもわかっている一方で、小中別れているメリットもあると思うので、一つでいいという議論で終わるのではなく、様々な面で考えながらも最終的に、人懐っこいかわいらしい門真の子たちにふさわしいものを創ればいいかなと思っています。

会長
　地域の委員さんは小中一貫校について盛り上がっているところですが、今、明智先生がおっしゃった課題という点ではどんなことが言われていますか。

委員
　やってみると難しいことも色々あります。私も教頭で一貫校に入りましたので。例えば体育の用具の跳箱一つにしても、小学校、中学校で大きさが違うんですね。そういった現実レベルの問題はあります。でも、その中で課題を共有して、みんながどのように子どもに向かっていこうという時にまた一体感が生まれていきます。ですから課題は決して悪いものではなくて、その中で教員も育っていくと思います。その中で一番難しいと思ったのは共有です。何をどのように共有するのかや、具体的に共有する時間の問題、例えば中学校の先生は部活の指導をされていて、小学校の先生と時間が合わなかったりだとか、中学校の方は細かい

ことを言うと生徒指導委員会などを授業の空き時間に設けて交流したりできますが、小学校はなかなか空き時間をつくれませんから、子どものことについて、教員のやり方について共有する時間が難しいし、最後まで課題ですよね。

会長
　課題まで共有するというのはかっこいいなと思いました。課題は別物として考えるのではなくて、それも小中一貫校のアドバンテージで包み込んでいくというようなことでしょうか。

委員
　そうです。

会長
　ありがとうございます。

委員
　午前中に学校を見せてもらって、僕たちの概念を根底から覆すというか、７年、８年、９年という言い方もそうですし、卒業式も修了式と呼んでいて、保護者の方も来たい人はどうぞという感じで、普通６年生は涙涙の卒業式をして、けじめをつけて中学校に上がるというのが、我々がずっと思っていた学校のあり方ですが、そうではないんだと。本当に９年間で義務教育一つなんだなということを目の当たりにして、なるほどなと思う部分と、一方で学校規模について、ほそごう学園はオール２クラスでした。１年から９年まで。これがもし、４クラスや５クラス規模になったら厳しいなと思いました。これだけの子どもたちを１か所に集めるのは大変だろうし、行事一つ行うのも大変なので、義務教育学校の適正な規模はどれくらいなのかと思いました。門真でやるとしたら、どこの校区が適正規模になるのかなとか、そもそも適正規模とは何なんだろうとか思いました。もっと大きい規模の学校もあるんでしょうかね。

委員
　適正とまでは言いませんが、ちょうどいい規模は２クラス、３クラスがいいと思うんですが、私たちの学校は５クラスから６クラスありました。

会長
　京都は５、６クラスでやっているんですか。

委員
　いえ、私たちの学校は統合した学校で、児童生徒数もどんどん増えてきて、また小中一貫教育によって人が集まってきたということもあります。そのようなこともあって５クラス、６クラスありました。多い時には片方の小学校だけで５クラスという時代もありましたから、中学校に行けば７クラスとかある状況です。ですから、適正は何かということは一概に言えません。一方で、小規模校には小規模校の面白さがあります。今、全国的にはそれぞれの人数に合わせた自分たちの地域に応じた小中一貫教育を行っています。途中でも言いましたが、市町村の特性を出しやすい取り組みで、そこに合したものができます。

会長
　では、あまり小中一貫校はこれくらいの規模がよいというような標準的な規模というのは考えなくていいということですか。

委員
　はい。

会長
　ちなみに、少ない学校でいくと。
砂子小と脇田小を合すと何クラスくらいありますか。子どもの数も。
　突然のふりですみません。

委員
　砂子は１クラスです。

会長
　砂子は１クラスですね。

委員
　中学校は３クラスです。

会長
　中学校は３クラスですか。では小学校を２つ合わせたら小学校３クラス、中学校３クラスくらいですかね。ちなみに１番大きい小学校はどこですか。

委員
　みらい小学校ですね。

会長
　みらい小学校は何クラスくらいですか。

委員
　４クラスが最大かな。

会長
　３、４クラスくらいですか。ではそんなに大きい学校はないんですね。

委員
　子どもが小学校に行っているときは700人くらいいましたが、今は600人台になっています。

会長
　そうなんですか。ちなみに大和田小はどのくらいですか。

委員
　大和田は少なくなりました。270人を切っています

会長
　わかりました。

委員
　今出ている意見とほとんど重なりますが、私の意見ということで、考えたことを話します。不安材料もいっぱいあると思うんです。その不安を払拭するのに十分な材料が全部出ていたような気がします。特に相乗効果を生んでいるというふうに見させてもらいました。例えば小学校であれば上の学年の子、中学生を見て、未来への展望を持つというところが大きかったと思いますし、中学生を見て、よき先輩、そして地域の人を見て、よき大人、こういったところへの憧れがすごく出ているメリットがあるのではないかと思われます。
　また、中学生から見た場合ですけれども、相手が小さい子どもになりますから、特に優しさの面が非常に強く出ているのではないかと思います。その中で寛容性を学ぶとか、あるいは包容力のようなものを学ぶとか、そういったものが強く

出ると思います。相手が小さいですので、自分が引っ張らないと、先導しないといけないという意識に駆られて、当然責任感も養われるのではないかと思います。ですから、この会でも出ておりますが、キーワードのつながりという言葉に全部含まれるのではないかと思います。

委員

午前中、見せてもらって、子どもの頃を思い出していました。山間部だったので、小学校１年生から中学校３年生まで常時小中一貫で登校するんです。上の子が下の子の面倒を見る環境なので、中学生が小学生をすんなり受け入れる土壌だったんです、田舎だったので。ただし、地域どうしのいさかいはありました。それぞれにお山の大将が居るのでね。

また、小学校１年生の入学式には６年生が出ます。春には、合同遠足に行くのですが、行きは一緒に歩いて帰りは６年生がおんぶして帰ってくるんです。運動会も中学校との合同でやっていました。運動場も広かったので。私の小学校は、37つの村から集まってきて、1,000人くらい、もうひとつが800人、なので人数が多いわけです。それぞれのお山の大将もいますが、子どもたちの中で解決するわけです。

そういう意味で、午前中学校を見て、私らの頃によく似ていると思いました。

課外授業なんかで、このお兄ちゃんは畑が上手、このお兄ちゃんは音楽が上手というように、それぞれの上級生の得意分野に低学年の子がついていく。いじめというもなくて、都会に来て初めていじめという言葉を聞いたんでね。

そういう意味で、勉強も大事やけど、やっぱり地域の環境づくりが大事だと思います。このほそごう学園でも、田植えの写真がありましたが、それが一番大事じゃないかと感じました。門真でも学校敷地に余裕があるところがあります。そのまま置いとくんじゃなくて、子どもたちの課外授業なんかで活用したら理科や社会の勉強にもなるし、植物名を日本語じゃなくて英語で表示することもできるわけです。そういったことが良いと思います。以上です。

会長

ちなみに子ども時代って60年前くらいですよね。60年前の学校とあの学校が重なるわけですか。昔あった上下のつながりがあそこで表現されているわけですよね。

委員

上の子が下の子を可愛がる。下の子が上の子を敬う。呼び捨てにするようなこともないですからね。そういう教育も自然とできていた。ですので、今日見て、

良いなぁと感じたんです。

会長
　大田さん、今日ご覧になってないので、話しづらいと思いますがお願いします。

委員
　私も徳之島の小さい学校でした。今もそうですけども、小学校１年生から中学校３年生まで一貫性です。例えば中学校３年生が、小学生の兄弟などがいて、顔を知っているので、喧嘩はありません。
　運動会もみんな一緒、小学校１年生から中学校３年生まで。朝の朝礼も一緒。

委員
　一貫校はそんな時代からあったということですね。

会長
　すごいですね。

委員
　ただ、徳之島でもうちの学校だけなんです。なぜかというと１学年23人くらいしかいなかった。他の小学校は４クラスくらいはありましたから。そこに行くまでにどうしても時間がかかるから、そこに小中学校を作ったわけですね。それでも山の上からふもとから、１時間以上かけてくるわけです。そのときは特に感じませんでしたが、大人になって考えるとすごいことですね。
　それを都会に当てはめると、クラスが多いから難しい部分もありますよね。私のところみたいに人数が少ないとやりやすいかなと。すみません、昔の思い出話ですが。

委員
　それなら、今日行ってなくても大丈夫ですわ。それだけ一貫校で実体験されてるわけですから。

委員
　校長も１人、教頭も１人、学校の先生も一緒にいます。

会長
　そんな前からあったんですね。ちなみに、それも60年前くらいですか。

委員

そうです。今でも一緒ですよ。

会長

それは、一度見に行ったほうがいいかもしれませんね。小中一貫校の原点かもしれませんよ。すごいですね。ありがとうございました。

副会長

今日、研究部長が初めに話されましたが、クラス替えのなかった子どもたちに、「はじめまして」の経験をさせる、そして小学校の先生方からは、「その後が見える」という表現をされました。これは、子ども側から見たら、それぞれの学年にとって、「先が見える」ということになるんでしょうね。中学生にとっても、小さい子の面倒を見ながら、「自分の先」を見ているんだと、今日見させてもらって考えていました。

先ほど西先生から一貫校の説明をしていただきました。実際やっていく中での心配もされていましたが、大阪府内でも、一貫校を名乗って取り組んでいる学校も増えてきました。西先生の一貫校の定義から行くと、共通している課題は、めざす子ども像を共有して、さぁやりましょうまではいけても、揃えて続けるの部分は、学習計画の系統性なんかも含めて、なかなか踏み込めず、苦しんでいるところも結構あります。そういう意味でいくと、今日のほそごう学園は以前から小中の連携の時代から、めざす子ども像の共有のみならず、人権教育を軸に、学び方や理解の仕方、学習スタイルも小中揃えて取り組んできた経緯がある。私もいろいろな形で関わった経験がありますが、そういったベースがあったんだろうなと思います。

人権教育というと〇〇問題について勉強するみたいなイメージがあるんですが、今日説明があったように、めざしておられるのは、人権としての教育とおっしゃいましたが、一人ひとりの学ぶことを保障することが人権教育、子どもたちの未来と創っていく力をつけることが人権教育そのものなんだという表現をされていました。今までやってこられたぶれない軸がしっかりとあるので、このシステムがうまくはまったんじゃないかと感じました。

そういう意味では、めざすところは、前回説明があったように、言葉は別として、キャリア教育をベースに創っていきましょうという提案がありましたが、この後の議論になると思いますが、門真の教育の中身として、どう軸を持っていくかというのが大事なところかと思います。

ほそごう学園は細河小学校、中学校の時代から知っている関係で、昔のことを思い出しながら見学させていただきました。

会長
　軸を創っていくというのは、なかなか難しそうですが、あそこの場合の軸ってなんでしょうか。

副会長
　人権教育と表現されましたが、目の前のいろんな背景を持った子どもたちの将来をどうするかということにこだわってやってきておられますので、そこが軸になっているんじゃないかと思います。

会長
　ありがとうございました。
　最後に私からも一言言わせていただきますと、印象的だったのは先生方の元気がいいということです。最後にゴルフの話が出たり、いろいろな活動の話をしていただいたり、学校自慢みたいな話になりましたよね。先生方が自分の学校を自慢できるっていうその気持ちがすごいなという気がしています。そういう意味で、小中一貫校は子どもたちも変わるでしょうが、先生たちも、意識も含めて相当変わられたんじゃないかなという気がしていて、それも一つの小中一貫校の可能性なのかないう気がしました。
　それと、あそこまで自慢できるようになるには、ただ単純に小中一貫校にしたからあのようになるというものではないと思うんですね。浦嶋先生がおっしゃったように、軸が必要であるとか、取組が重要だということで、自動的になるのではなくて、小中一貫というのを一つの手段としつつ、そこからどうやってその特性を活かしていくような取組を実現していくかという、そこのところが、先生方でも共通の目標に向かっておられるような気がしました。やって終わりじゃなくて、それをどう活かすかというところまで踏み込んだ議論が必要になってきそうですし、そのうえで、さっき小中一貫校は昔からあったと話があったように、小中一貫をあまりにテクニカルにとらえて、技術だけを施すようなことではなくて、違う学年が一緒に居て、いろんな触れ合いがあることによってお互いに成長していくという、そこら辺の本質を見過ごさずにやっていくということが大事だと思います。
　今日いいなと思ったのは、5、60 年前の小中一貫の原点は、違う学年の子どもたちが一緒に居て、そこで縦の関係が生まれるということが大事なんじゃないかなということです。
　そういう意味で、皆さんつながりという話が合って、可能性は随分あるように思いますがいかがでしょうか。それは、上村さんがおっしゃったように、どこかの学校だけ小中一貫をやってその他はしなくて良いということではなくて、門

真市全体を考えて、小中一貫の良さを全ての学校でどう活かしていくのかというところまで発展させながら考えていくということで、ここからスタートさせていくのがよさそうですがいかがでしょうか。意見があれば。

委員

一貫校が良いと先ほど申し上げましたが、今のままでも良いとも思います。

今でも小学校は小学校で卒業して送り出していますし、二中とも、評議員としていろいろ話をさせていただいていますので、どちらにも良いところはあるので、とにかく門真のまちを素晴らしくしたいとこのように思います。

委員

今の日置さんの意見も分かります。

私は、もう一つ。ひとつの学年が 20 人を切るような学校も現実に出てきています。そうすると教師の数の問題が出てきます。そうなると、子どもたちに十分な教育を提供できないというか、そういう状態になってくるんじゃないかなと心配しています。そういうときに、今回のような９学年の小中一貫という形ができるならば、中学校と小学校、あるいは小学校２つという形でできるならば、もし登校や通学路の意見があるのであれば、ほそごうのように送迎バスも考慮に入れたりして、子どもたちにとって楽しい、子どもたちにとって良い教育を受けさせてあげたいなぁと思います。

会長

多分おっしゃっていることは同じですね。

委員

子どもに幸せになってほしいということですね。

それに尽きるわけです。

会長

そこですよね。

委員

しかし、14 校ある小学校は８校くらいに、中学校も６校から４校くらいに減らしていかないとなとは思っています。

会長
　学校の先生は、そういう学校が変わることに関しては、比較的消極的と聞くんですが、それについては前向きにどんどん行けそうですか。

委員
　はい。私は積極的に進めたいと考えています。というのも、もともと中学校の教師で、今は小学校に変わっているんですけども、中学校の時には、小学校に対して、もっとこういうことやってほしいと思っていましたし、逆に、小学校に変わって、中学校にはいろいろやってほしいという思いがあるので、共有しやすい場ができれば、良い学校が創れるんじゃないかと考えています。

会長
　前向きな意見ありがとうございます。
　それでは、地域もＰＴＡも学校も、小中一貫教育を積極的に取り入れていこうということで今日のところはまとまったように思うのですが、いかがでしょうか。

委員
　私も大賛成です。それでいいんじゃないかと思います。

会長
　最後にこれから門真の学校について、小中一貫を踏まえてどう進めていくのか、サジェスチョンしてもらえますか。

委員
　本当に面白い話を聞かせていただいたなと思っています。大田さんがおっしゃった校長先生が１人やったというのは驚きました。普通は小規模校であっても、小学校の校長と中学校の校長と置くんですよね。いわゆる僻地というとこでもね。小中一貫が、一周回ってきたんですかね。システムとして非常に驚いたなと思います。
　また、国吉校長先生がおっしゃったように、私たちが採用されたことは、中学校では、小学校は何をしているのか。小学校では、中学校でやってくれると思っていたのに。こういう時代だったんです。今日見ていただいたように、小中一貫校でなかったとしても、小中が一緒になって、この地域の子どもたちのことを一緒に考えていこうということで進める限りは、小と中の教員の擦り付け合いはなくなっていきます。それは教師の立場でも感じているところですので、その方

向を目指していただけたらなと思います。
　私の居た学校を改めて考えますと、小学校をまず５つ統合したんです。もともとは、９つの小学校があったんですが、徐々に減ってきて、最終的に５校を統合したんです。当時はそれぞれの学校が１００人以下というところになっていて、これから子どもたちの教育を保証していきにくいということで統合したんです。そのあと、小中の統合、つまり縦のつながりに向かっていったんです。ですので、横をやって、それから縦という流れでやりました。
　どこまでも考えていたのは、地域の子どもたちが将来にわたってこの地域で育ってよかったと思えるようにしたいということが一貫してありました。先ほど言いました５−４制という言葉ですが、これは私たちが言ったんじゃなくて、地域の方が言ったんです。私たちが地域に、これからは小学校の子どもたちを中学校に送って一緒にやっていこうと思っています。そうすることで、リレーゾーンをうまく作っていけると思うんです。という話をしに行ったんです。そうすると、一番初めに説明に行った地域の方が、「それは先生、５−４制ですな」とおっしゃったんです。それがそのまま新聞に載りました、５−４制。こういう風に地域の方に支えていただきながら取組を進めたわけです。
　やっていく中で、いろいろな困難もありましたが、面白いこともありましたし良かったなと思っています。門真の子どもたちがどう育っていくのかをもう少し長い目で見ていただいて、考えていただけたら嬉しいと思っています。

会長
　そうですね。
　ありがとうございました。
　小中一貫教育については、大いに可能性のあるものとして、これからの学校づくりに是非積極的に反映していくということで、次に行きたいと思います。小中一貫教育を含めて、門真がめざす教育がどういう方向にあるべきかについて少し議論をしたいと思います。
　既に半分くらいは議論が進んでいると思いますが、改めて事務局からご説明をお願いします。

事務局
　先ほどの西先生のお話、午前中のほそごう学園の視察を踏まえての、皆様の議論を拝聴していますと、これから説明する資料は、もう皆様には必要のないのかなと思うほど、イメージを持っておられると感じておりますが、資料３についてご説明させていただきます。

門真の教育の方向性ということで、前回、キャリア教育や小中一貫教育についてご説明いたしました。その中で、皆様の意見をまとめると、人とのつながりをつくるというのがどうもキーワードではないか、「人と人のつながりのなかで育ち、一人ひとりが自立していくことをめざす」教育ということで議論が進んだところです。

では、キーワードとなっている「創りたいつながり」とはどういうことか、というのを図にしましたので、ご説明させていただきます。

まず、「多様な人間関係の構築」という言葉が出てきました。これを少し分解すると以前から出ている「縦のつながり」と「横のつながり」が考えられるのではないでしょうか。

縦のつながりは、先ほどから議論になっております、「異年齢」「異学年」、また大人も含めて異なる年齢との関わりということになります。教育側から見ると「幼保・小中一貫教育」というようなことになるかと思います。

続いて横のつながりは、同年齢の子どもとの関わり、地域との関わりというようなことになるかと思います。

もう一つ、前回の話題の中で、「時間軸のつながり」という言葉も出ています。これはなんだと考えると、「将来の自分とのつながり」というのが良いのではないかと考えました。これは、自分の生き方を考えるという視点です。

教育の側から見ると将来どうなっていくのか、どういう生き方をするのかという、いわゆる自立をめざすキャリア教育ということで考えればよいのではないかと思っています。

このように、門真の教育の中で創りたいつながりというのは、縦のつながりと横のつながり、プラス将来の自分とのつながりという整理をしてみました。そして、これらを実現するためにどのような学校を創ればよいのかをここで議論していただきたいと考えています。

もう少し具体的にイメージしてみたいと思います。

まず、縦のつながりについてです。先ほどのとおり、異年齢、異学年、異校種とのつながりです。ここでいう校種とは、中学校、小学校、幼稚園、といった学校の種類のことになります。

ひとりの子どもを主人公に話をしてみたいと思います。この子は小学生低年齢ぐらいだということにしましょう。異年齢ということなので、高学年、次に中学生や高校生が考えられます。そして、学校の先生も、縦のつながりと呼んでもいいのではないでしょうか。逆に幼稚園や保育園の子、兄弟なんかもいるでしょうし、もっと小さな子と触れることも考えられます。こういった人たちが、主人公の子どもから見ると縦のつながりになり得るかと思います。そして、上級生の授業を見たり、運動する姿を見たりという中で、「あんなことするんかぁ」、「か

っこええなぁ」、「あんなふうになりたいなぁ」というような憧れの気持ちや、将来の自分のイメージを抱く。今度は年齢が下の子を見ると、「かっこいいとこ見せたろう」、「困っていたら助けたらなあかんな」、そういう優しさや包容力といった感情が湧く、こういったことが縦のつながりをつくるイメージであり、良いところかなと思います。

次に横のつながりのイメージです。子ども目線で見ておりますので、同年齢の子どものつながり、また地域の大人との関わりということになろうかと考えています。

真ん中に主人公の子どもが居ます。まず考えられるのは、同じクラスの子、これが学校で一番近い横のつながりになるのかなと思います。次に同じ学校の地学クラスの友達、そして違う学校に通う同級生の友達、これも同学年であれば、横のつながりだと思います。さらにもう少し広げると、地域にいる中学生と一緒にスポーツしたり、大学生から勉強を教えてもらったりするのも、横のつながりと言ってよいのではないでしょうか。さらに地域の大人との関わり、少年野球チームで指導を受けたり、レンコン掘りを一緒にしたり、運んでくれた荷物を受け取ったり、消防訓練をしたりといった、地域の大人との様々な関わりも横のつながりの要素だと思います。

もう一つ、地域には子どもたちを見守っている大人たちが居ます。様々な場面で見守り活動を行っている地域の人、これも子どもたちにとっては、広い意味で横のつながりと呼んでもいいのかなと考えています。

こういったことが横のつながりと考えているわけですが、このように見ていくと皆さん疑問に思われるのではないでしょうか。地域の大人、あるいは学生との関係は、子どもから見ると、横ですか？縦ですか？といった課題というか疑問が出てきますよね。これを考えていくと、やはりこの人との関係は縦だ、とか横だ、とか割り切れるものではなくて、このように、面のようにとらえる必要があるなと考えます。縦でもあり横でもあるということも認めたうえで、子どもとの関わりを持つ人は、この面の中にいるイメージで考えてみました。

それでは、もうひとつの時間軸、将来の自分とのつながりについてです。これは、今までの２つとは違って自分とのつながりです。どのように図にするか悩みましたが、年齢ごとの自分とのつながり、イメージ化するとこのようになりました。主人公の子にとっての人のつながりが面になっています。この子が成長して年齢が変わると、その時点での人のつながりの面ができています。同じように、成長段階に応じて人のつながりの面ができます。

こうしたことがどんどん重なっていくことで、10年後の自分、将来の自分と今の自分とがつながる。このように、成長するにつれて人とのつながり面が何層にも重なるイメージをしていくのが良いのではないかと考えました。

この重なった全部がこの子自身のキャリアになるものだというイメージです。

最後にまとめますと、人とのつながりの中で、自分の生き方を見つける門真のめざす教育とは、キャリア教育という言葉は見直しても良いのではないかという議論になりましたが、最終的にめざしたいのは、子どもたちの自立となります。そして、子ども達が人のつながりの中で成長していく。成長していく中で、また人とつながっていく。そして成長していく将来の自分とをつなげて見ていく。

これ全体をとおして、子どもたちは自分の将来について考え、大人たちも子どもを見守るということになります。

繰り返しになりますが、縦のつながりと横のつながり、そして時間軸を加えて、将来の自分とのつながりという３つのつながりを創っていきたいということを、前回の議論を踏まえて、改めて整理したということです。

最終的にこの言葉をどうするかというのもこの審議会の課題でありますが、門真の教育がめざしていく姿としては、このようなイメージとなります。

また、先ほど西先生のお話にもありました通り、このイメージを共有していくことがすごく大事だと考えています。人とのつながりの中で、一人ひとりが自分の生き方を考えていく。そういう教育をめざすんだということをみんなが共有する。そしてしっかり共有したうえで、一貫した手立てを考え、系統性を持って子どもたちの成長を見ていくことで、みんなで子どもたちの自立をめざした教育を進めていくことが大事だと思います。

今日の皆さんの議論を踏まえて、改めてそう思っています。

それでは、本題に戻りまして、これらを実現する学校とはということで議論をしていただくわけですが、これまでの話の繰り返しになります。

縦のつながりを創る学校とはどういうものか。横のつながりを創る学校とはどういうものか。将来の自分とつながりを創る学校とはどういうものか。さらに付け加えると、今回議論に出ているように、そのほかに新たな学校づくりに必要な視点があるのではないかと思いますので、つながりがキーワードとはなっているものの、それにこだわりすぎず、様々な視点で議論していただきたいと考えています。事務局からは以上です。

会長

はい、ありがとうございました。非常によく整理していただいて、今まで議論してきたこと、それから、これから議論すべきことが簡潔にまとまっていると思います。そういう中で、小中一貫の議論というのはおそらく、上から一つ目の縦のつながりというところで、上下関係のなかでの子どもの育ちを、小中一貫とい

うのは可能にするというような議論であったと思います。今度は、上から二番目の横のつながりについて考えたいと思います。横のつながりというのは同年齢とのかかわりというのは、学校のなかでありますし、地域のなかでもあると思いますが、地域と学校がどうかかわっていくのか、というところも一つの大きな視点になると思いますので、それについて少しご意見があったり、あるいは、今の状況で何かご意見があればと思います。本日のほそごう学園の説明では、地域との関係というのは、特段、話はなかったような気がするのですが、私の聞き損ないだったのでしょうか。なにかありましたでしょうか。

委員

ないですね。

会長

なかったですよね。そういう意味でも、これから考えていかなくてはいけないところだと思いますので、例えば、今学校で地域とこういうふうにつながっている、今後こういうふうにつながりたい、など話があればお話をうかがいたいです。それから、西先生に小中一貫とか、これからの学校づくりにおいて地域とつながることの意味や必要性というのはどの辺にあるのかというのをお話しいただきたいと思いますが、まず、学校で今地域とのつながりはどういう状況でしょうか。

委員

課題のひとつかなと思います。地域でも青少年育成協議会とか、そういった集まりを作っていただいていて、子どもたちを見守っていただき、いろいろ手伝ってもらい、育てていただいているのですが、そこにわれわれ学校の教員がどこまでかかわっていくかというところが、最近希薄になりかけているような気がします。管理職も一緒にやらせてもらえるようにしているのですが、もっと中学校側が顔の見えるような関係になっていないというのは感じているところです。それをこれからどういうふうに、地域の方々の力を借りながら一緒にやっていくというのは、ひとつの大きなテーマになっているのかなという気がします。

会長

どういうときに地域の力を借りたいと思いますか。

委員

例えば総合学習のとき、地域の方はいろいろな「ちから」を持っておられると思うので、子どもたちに教えていただける場を私たちがもっと設定できたらな

と思います。

会長

国吉先生いかがでしょうか。

委員

小学校の場合を考えてみたのですが、今現在、取り組んでいるのはゲストティーチャーです。田んぼや畑の栽培のノウハウを教えていただく先生や、動物を飼育しておりますので、飼育に関する専門知識をもった先生がいらっしゃったらなあと思います。あと、虫の学習がありますが、じつは理科の教科があまり得意ではない先生が多いです。私は教科が理科なのですが、一人で教えるわけにはいきませんから、私より虫などに関しての知識の深い方がいらっしゃいますので、そういう方に先生として入っていただけたらありがたいなと思います。「サタスタ」という土曜日に行う自学自習の学習会でかかわっていただいています。また、水曜日の午後から「まなび舎」という会をやっております。そういった会も五月田小学校だけではなく、もっと広くほかの学校でもやっていただきたいと思います。ほかに行っているのが昔遊びです。駒回しや凧揚げ、羽根つきもそうですが、最近はそういう遊びをしないので、地域のお年を召された方に来ていただいて教えていただいているのですが、とてもありがたいと思っています。もっと積極的に子どもたちの学習にかかわってもらう方法があるのではないか、あるいは、学校の安全に関する部分についても、もっと幅広く地域にはいろいろな知識をお持ちの方がいらっしゃると思いますので協力していただけたらいいなと思います。以上です。

会長

今おっしゃられた「サタスタ」と「まなび舎」というのは、先生のところの学校でしかやっていないのでしょうか。

委員

すべての学校でやっていますが、学校によって盛んなところもあれば、そうでないところもあります。

会長

実践しておられる方、ご説明お願いします。

委員

「サタスタ」は土曜日に行っています。「まなび舎」は水曜日の学校の授業が終わってから行っています。まずは、家で宿題がきちんとできるようにというところから行っています。図書室を開放していただいて行っています。勉強の教え方は先生にはかないませんが、そばについていてあげるだけで宿題ができたり、先生に「はなまる」をもらったことがすごいねと褒めてあげたりするだけで、頑張るちからになればいいな、というような活動を行っています。平成21年から楽しくお手伝いさせていただいています。

会長

ちなみに、毎回同じ子どもたちが来るのでしょうか。何人ぐらい来るのでしょうか。

委員

そうです。今は30名ぐらいです。

会長

ありがとうございます。

ほかにも地域の方で、こんなふうにかかわってほしいですとか、かかわっているですとか、ないでしょうか。

以前に、親も含めてもっと学校にかかわっていかなければ、いい環境が創れないのではないかという議論がありましたけれど、横のつながりについて、こうあってほしいとか、こういうことであればできるとか、ないでしょうか。

委員

保護者同士のつながりも、だんだん希薄になってきていて、今ではクラス名簿もないし、名札もつけていないので、私たちが学校に行っても、どこの誰なのかわからないですし、この子の親は誰なのかというのも本当にわかりづらいです。ＰＴＡをしている私たちとしては、そういったところで横のつながりを深めていかなければ、どこの子なのか誰の親なのかもわからない状況ではよくないので、保護者同士のつながりを、もっともっと深めていくべきではないのかなと思います。保護者同士のつながりでしか、子どもたちがどのようなことで問題を抱えているのか見えてこないというところがありますし、ほかの皆さんが同じ思いでいるということはないので、もっとつながりを深めていくべきだと思います。

会長
　問題はそこですよね。みんなが同じ思いであればいいのですが、やはりいろいろと差はあると思うので、関心のない方たちが学校にどうかかわって、自分のこどものことを含め、考えてもらえるかというところなのでしょうね。なにかＰＴＡとして工夫されていることはないですか。

委員
　私は大和田小学校ですが、今、大和田小学校のなかでも、地域の方にどれだけ協力していただけるか考えています。学校の門を入ると花壇があります。そこに毎年花を植えていただいていたのが、地域の老人会の方でした。しかし、今年は年を取りすぎて難しくなってきた、ということになり今後どうしようかという話をしているのですが、老人会に限らず、もう少し広い範囲の地域の方々に協力していただけないかと、校長先生と話を進めているところです。子どもたちからすると、地域の人たちのことを知らないので不審者と思うこともある。子どもも大人もお互いに顔を知らないというのは良くないと思う。地域全体で安心なまちを創ろうとするならば、皆が顔見知りというのが一番安心なので、そういう機会をＰＴＡとしては創っていかないといけないと思っています。大和田小学校では、ＰＴＡ・学校・保護者で大和田フェスタという祭りをやっています。そのなかで、子どもたちが地域の人たちと顔を合わせてつながっていく、そうすると、地域としても子どもたちの安全につながるのではないかというので、そういった取り組みを行っています。まだまだ地域にも、積極的にかかわろうとしない方々もいらっしゃるので、なるべくそういった機会を創って、いろいろなかたちで地域を絡めていくようなシステムを創っていくことが大事かなと思っています。

会長
　そういう意味では、地域のつながりを創っていくうえで、学校が一つの拠点になっていくのは当然のことだと思うのですが、拠点としての学校というのは、使いやすかったり使いにくかったりということで言うと、言いにくい話かもしれませんが、今の学校はどうなのでしょうか。敷居が高いのでしょうか。

委員
　個人的には、敷居が高いとは思いません。学校というところは、地域の人たちがみんな知っている場所でもっと開放できればよいのでしょうけど、不審者ですとか、事件が起きてはいけないですし。難しいところだと思います。私は学校とは別で、地域のなかで防災関係の組織を創っているのですが、その組織で学校

の教室を使わせてもらったのですが、学校も地域もお互いさまで、持ちつ持たれつの関係を創っていければ一番いいのかなと思います。学校も地域のひとつで、そういったなかでやっていくのがいいのかなと思います。

会長

学校も地域のひとつという考え方はいいですね。

学校側は学校の活動をサポートして下さる方がもっと来てほしい。そして、地域はもっと学校をひとつの拠点としていろいろなつながりを創っていきたい。その両方を学校という場を使って実現することが重要になってくると思うのですが、それはつまり学校をどれだけ開けるか大きいこれからの課題だと思うのですが、こうやれば学校ってもっと開けるというのはあるのでしょうか。

委員

昔の学校での事件があって以来セキュリティーが厳しくなった。気になるので学校に行ったら怒られとか不審者に間違われたとか、実際に聞いていますので。大変難しい問題ですね。

委員

私は生活指導員をしております。あるとき、子ども110番の旗を掲げてくれている方２・３人から、子どもたちとなじみがないのに子どもたちがいざというときに駆け込んでくるか？という意見をもらった。そのなかで去年、門真小学校区で子ども110番の家を児童が回るスタンプラリーした。それは、つながりをつくるために。急遽やったが低学年38人と保護者含めて50名程度参加してくれた。一応成功と思っています。代表者会議でほかの校区もしませんか？と。予算もない中ですがどうですか？　保護者と一緒に回るなかで、ここの道路は怖いなとか、ここは夕方は薄暗いなとかわかりますよ。そういったことが地域と子どもとのつながりになるし、地域との関係でいうとそういうのが一番いいなと思います。

会長

学校の思いと、地域にも思いや考えがあって、取組も実際にあって、これを全部合わせたら本当にいい学校になりそうな、地域とつながっていきそうな気がしますが、その時に学校をどう地域に開くのかというあたりを最後に先生方どうでしょうか。

委員

私はフルオープンでいいと思います。

会長
　こういう先生ばかりだといいですね。
　上甲委員はいかがですか。

委員
　お互い協力して、子どものために、どのようにして取り組んでいくかというところだと思いますが、私たち管理職の立場から悩ましいのは、地域の方と一緒にやっていくときに、夜や時間外になることが多いので、どのように先生方に説明して、納得して動いてもらうかというあたりが、悩ましいところです。
　あとは、なかなか顔が見えない。管理職や生徒指導の先生なんかは、地域の会合に顔を出したり、見回りを一緒にやったりでよくわかっています。それ以外の一般の先生は、例えば、良くないことではありますが、自治会長の顔も知らないようなケースもあると思います。小学校だとまた違うのかもしれませんが。その辺りは前に進めないと、本当の意味での連携はまだまだできていないんじゃないかなと思います。ひょっとすると、一般の先生からすると他人事のようなところはあるのかもしれません。そこら辺は管理職の仕事かなと思います。

会長
　そういう意味では、小学校よりは中学校のほうが地域とのつながりは難しいんでしょうか。明智先生いかがですか。教頭先生は最前線で地域とやり取りされていると思うのですが。

委員
　おっしゃられている通りだと思います。現実問題としては、本校でも働いていらっしゃる保護者も多いので、ＰＴＡの会長さんにアイデアを出していただいて、おやじの会をやろうと投げかけたんですが、実現は難しいかもしれません。そういう意味で、働いておられる保護者の方、また、我々も働き方改革が一つの課題になっている中、そのバランスをとるためにどうしたらよいのか悩んでいます。ただし、本市では、みなさん気持ちはあるので、そのバランスを取りながらやれることを出し合いながらやっていくのが一番長続きするかと思います。無理してやっても続かなければ、結果的にいいものにならないと思いますので、今日いろいろご意見が出た中で、やれることを紡ぎ合わせれば、良い門真市になるのではないかなと思っています。

会長

それでは、時間も迫っていますので、最後に先生方、地域とのつながりについてどう考えるか、まとめていただけますか。

委員

私の仕事の一つとして、文部科学省のコミュニティ・スクールの推進員というものをしておりまして、ＣＳマイスターと呼ばれるものなのですが、今年は集中的に守口市に関わっています。そこで話をしている内容の一部ですが、これまでの議論に関わることをお話いたします。コミュニティ・スクールという制度の説明は今日は省きますが、今、皆さんの話で出てきたボランティアですとか、支援の問題ですが、日本の中では、いわゆる学校の支援ボランティアはのべ600万人の人が参加していると言われています。ボランティアの内容ですが、一つは学習支援という部類があります。もう一つは環境整備や安全の分野があります。図書室の整備や児童の登下校の安全管理という分野があります。それから専門的な教育支援ということで、総合的な学習の講師でお世話になっている方もいますし、家庭科のミシンを使う学習のボランティアというものもあります。私たちの学校でも九九ボランティアということで来ていただいたこともあります。各クラスに９人程度入っていただき、子どもを一人当たり３人くらい見ていただきました。このようにいろんなボランティアがあります。また、文化、スポーツ行事、クラブ活動の支援や先ほど話にありましたサタスタのようなことも行われています。このようにいくつかの分野があり、学校支援ボランティアは行われています。続いて映像を見ていただきます。このように、学校支援ボランティアというのは隣の先生だと思っています。皆さんがいろんな立場で子どもたちに教えてくださることで、子どもたちにとっていい栄養になります。教師が教えるのとはまた違う栄養の摂り方だと思っています。したがって、学校支援ボランティアイコールお手伝いというふうには私たちは考えていません。そしてこれがとても秀逸だと思ったのですが、これは義務教育学校の守口市のさつき学園で使われている用紙ですが、この用紙にしてボランティアの人が一気に100人以上に増えたというものです。一つ一つの項目の大きさの粒がそろっていて、例えば登校指導の10分間いってらっしゃいという活動、これも月、火、水、木、金いつ参加可能ですかという項目にチェックを入れるだけです。次は下校時見守り声掛け隊とか、新１年生下校時付き添いなど項目が細かく、単純にボランティアをしてくださいという形ではありません。授業も裁縫、ミシンや調理、習字、絵画、版画、そろばん、英語、九九。これは九九を入れてくださってうれしかったんですが、算数といわれると難しいんですが、日本人は多くの人が九九ができます。九九ボランティアをできない人はいないのではないかと思うくらいです。この

入り口が開いているか開いていないかだけです。それから校外学習付き添い、プール監視、芝生の水まきというものもあります。これを言われると、それぐらいならできるな、と思いますよね。また、校内清掃、菜園、囲碁、将棋、折り紙、お手玉、コマ回し、手芸、部活動では野球、テニス、バスケットボール、卓球、吹奏楽、美術、それから行事、運動会準備などがあります。一つ一つが、これならできるかなとチェックをつけるだけなので、瞬く間に100人以上集まったということです。ですから私たちはどこかで人の役に立ちたいと持っていると思います。特にここにお集まりの方々はその意識が高いと思います。それをいかしていく場をどのように作っていくかだと思っています。このような学校支援ボランティアが、学校との関りだけで終わっていると非常にもったいなくて、それをつないでいくことがマネジメントであり、私たちが今お勧めしているのが、ボランティアをコーディネーターさんでつないで、その長を学校運営協議会という形にしていくということです。これでコミュニティ・スクールまで一気に行くことができます。また、今、小中一貫教育とコミュニティ・スクールは両輪といわれていて、両方同時に進めていくことが非常の効果的であると私たちも言っているところです。

会長

ありがとうございました。学校の要望に対して地域には潜在的に学校に協力したいという方がたくさんおられて、そのチャンネルをどのように創っていくかということが重要だということだと思います。でも。今のチャンネルだとすぐにできそうな感じですね。

委員

私たちもボランティアの方をたくさん募集しました。その時に地域向けに1500枚チラシを配ったんですが、返ってきたのが３通でした。それは、皆さんすごい技を持っておられるのにどうして来てもらえなかったのかを聞くと、自分たちは仕事でやっていることなので、特別だと思っていないと言われました。この部分に思い違いがありますね。これ、すごいじゃないですかということがあるんですよね。例えば友禅染の方や焼物の方、このような方に来てもらうとすごいんです。子どもたちに、おじさんは不器用だから続けてこられた、と話をしてくれます。器用な人は上手になると辞めていったけど、おじさんは不器用だからもっと上手になりたいと思っているうちに50年経ったとおっしゃるんです。これは教師には言えない言葉ですね。地域の人が言うから効果があります。でも1500枚で３枚です。守口の地域はこのように細かくやり始めたので、一気に集まりました。

会長
　ありがとうございました。では最後に浦嶋先生にまとめていただきます。

副会長
　コミュニティ・スクールの話でいきますと、学校に何か協力するとか、応援するという段階があると思いますが、それからもう少し踏み込んで、色んな分野に、人材の宝庫である地域の人の力を借りて、運営協議会と書いてありましたが、一緒に学校をつくっていきましょうという話です。もっと言い方を変えると、学校の子どもに一緒に責任を持ちましょう、学校に責任を持ちましょうというような考え方だと私は思っています。ですので、現在ある従来の協議会よりも運営とつく限り、コミュニティ・スクールという限り、権限も、意見を言う力も強くなります。学校からすると警戒することもありますが、一緒に責任をもって学校をつくっていきましょうということが解決策ではないかということです。一方、実態を言えば、私の住んでいる地域もそうですが、地域コミュニティが少しずつ崩れていっている、自治会が成立しないとか、子ども会が集まらないということも事実としてあるわけです。ここでもう一度、子どもを真ん中にして、学校と地域がもう一度関係の紡ぎなおしをしていく時代といいますか、そうしないとこれからの日本の未来は大変なことになるという状況に来ているのではないでしょうか。門真のキーワードでつながりの中でという言葉がありますが、つながりの中でどんな力をつけるのかというと、やはり子どもは横や縦やななめの人とつながって、自分の未来を切り開くわけですから、つながる力をつけてあげなければならないと思います。今、みなさんは地域の中で色々な組織の中でつながって、成果をあげていただいています。仲間と一緒に、何が起こるかわからない世の中ですので、一緒に問題を解決していくつながる力が大切だとみなさんの話を聞いていて感じました。

会長
　ありがとうございました。今日は課題として３つ用意されていて、縦横のつながりをどう考えるのか、縦のつながりに関しては小中一貫教育でつながりがベースになって、上下の関係の中で子どもが育っていくような学校をつくりたいといった話があったと思いますし、横のつながりについては今まさに、地域とのつながり方をどう考えるのかということで議論があったと思います。特に地域から学校に向かっていろんな支援がいくというというだけではなく、学校が地域のコミュニティづくりや活動を活性化させていくような双方向の関係性をどう創っていくか、一方的に学校に奉仕するだけの地域ではだめなんじゃないかという気がしますので、そのことについても考えなくてはいけません。それから

将来の自分とのつながりは、前回キャリア教育ということで、言葉は少し色々ありましたが、自分の成長過程の中で将来の自分をどう考えるか、10年後の自分をイメージできるという話もありましたが、将来をイメージしながら自立に向けて、どのように子どもたちが育っていくのかということについて考えていく、おおむねこの３つ話は議論できたかなという気がしております。そして４つ目にほかの新たな学校づくりに必要な視点というテーマがありますが、これに関しては実は結構議論されていて、例えば単純な小中一貫教育だとか、単純な学校運営協議会をベースにしたコミュニティ・スクールづくりとか、キャリア教育というそういう言葉が持っているある種の方法があります。小中一貫教育といえばこうすればいい、コミュニティ・スクールといえばこうすればいい、キャリア教育だったらこうすればいいというものは方法でしかなくて、やはりそこに、どんな子どもに育てたいかという理想は入っていません。方法をコピーするのではなくて、門真の教育をここからどう考えるのか、小中一貫教育、キャリア教育、コミュニティ・スクールという言葉はそれでいいかもしれませんが、中身に関しては門真らしさというのをどういかしていくのか、それをしっかり考えながらやっていかないと、形式的なメニューだけがそろっているけれど、中身のない学校になりかねないので、それがもう一つの視点ではないかと、門真らしさをどう考えるかということになるかと思います。今日も長くなりましたが、これにて閉会いたします。

事務局

次回第４回審議会は８月21日の水曜日、午後２時からこの場所での開催を予定しておりますのでよろしくお願いいたします。

会長

内容について簡単にお話しいただけますか。

事務局

次回は今日出た議論をまとめさせていただきまして、おおむねこれからの門真の学校づくりというものは出ましたので、それをまとめることと、門真の学校の現状の資料を出したいと思っています。子どもの数であるとか、学校の築年数であるとかそのような内容の話もしていきたいと思っております。

会長

ではそういうことで、次回８月21日、またどうぞよろしくお願いします。今日はどうもありがとうございました。